The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	『聖アントワーヌの誘惑』（1874）におけるインドの神々
Author(s)	金﨑, 春幸
Citation	Gallia. 2020, 59, p. 69-78
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/77094
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

『聖アントワーヌの誘惑』（1874）におけるインドの神々

金﨑　春幸

1874 年に刊行された『聖アントワーヌの誘惑』第 3 稿では、イラリオンが登場し、まるで宗教史の教師であるかのようにアントワーヌにさまざまな知を与えた後、第 5 部の最後で悪魔としての正体をあらわす。インドの神々の場面も、よりアントワーヌの知的好奇心をかきたてるように組み替えられ、最後にはブッダがあらわれる。本論文では、この第 3 稿におけるバラモンの神々やブッダの場面の生成過程を、読書ノート、プラン、下書き草稿等の読解を通じてたどりながら、神々の背後にあるものは何か、探っていきたい [1)]。

執筆前の準備

1869 年 6 月、『感情教育』を書き終えたフローベールは姪のカロリーヌ宛てに「『聖アントワーヌ』の私の古いノートをまた取り出した。昔熱中したこの作品の全体を作り直そうと夢想している」と書き送っている [2)]。このように第 3 稿の準備は第 1 稿のためのノートの再読から始まり、さらに文献にあたってノートをとり、全体のプランを練っていくという作業が約 1 年間続く。インドについては、第 1 稿の準備のためにつくられた 6 頁の読書ノートがあるが、それに加えて 3 頁からなるノートがこの時期に作成される [3)]。その 1 頁目は次のように始まる。

Brahma 1ère personne de la Trinité, Dieu le Père qui s'incarna le premier pr venir annoncer sa doctrine, il y a bien des siècles. [...]
Siva. 2e incarnation, apportant le lingam, image de la vie & de la mort
Vichnou. 3e ———. amortit le feu dévorant du sivaïsme [4)]

これは、フリードリッヒ・クロイツェルの『古代の宗教』第 1 巻にある文章、「ブラフマーはインドの三位一体の第一格であり、この父なる神は幾世紀も前に自らの教義を告げに来るために最初に化身した」、「それから第二の化身としてシヴァ

1）本論はガリア 58 号掲載の拙論「『聖アントワーヌの誘惑』（1849）におけるインドの神々」の続編である。同論文の 51 頁、注 15 で指摘したように、19 世紀にはバラモン教（brahmanisme）という語は、ヒンドゥー教（hindouisme）も含む広い範囲の宗教を指していた。本論文でもその用語法を踏襲している。
2）Flaubert, *Correspondance*, Tome IV, Édition établie, présentée et annotée par Jean Bruneau, Gallimard, «Bibliothèque de la Pléiade», 1998, p. 58. 以下、プレイアード版のフローベール書簡集は *Corr.* と略し、巻数と頁数を記す。
3）Bibliothèque nationale de France, N.a.fr. 23668, f° 158 v°, f° 161 v°, f° 163 v°.
4）N.a.fr. 23668, f° 158 v°. 引用中の «pr» は pour の略記である。

があらわれ、生と死の像であるリンガム（男根像）をもたらした」、「次いで第三の化身ヴィシュヌが来て、シヴァの燃え尽くす火を和らげた」をほぼそのまま写し取ったものである[5]。ブラフマー、シヴァ、ヴィシュヌからなるインドの三位一体については第１稿の読書ノートでも言及されていたのだが、そこでは «trimourti» という語のみが記されていた[6]。一方、この第３稿のノートでは、«Trinité» だけでなく、«personne»、«Dieu le Père»、«incarnation» といった、キリスト教を連想させる語がクロイツェルの著作から引かれている。

この三位一体の後に、ブラフムに関する記述がある。

> Brahm. dieu suprême est l'unité & le tout. [...] ne saurait avoir aucune figure. [...]
>
> Les Dieux ne sont comme le monde que des émanations, des révélations de la divinité unique & infinie[7].

同じく『古代の宗教』から取られており、「一なる至高の神は、ブラフムと名づけられ」、「それはいかなるかたちも持ちえず、一であると同時にすべてである」、そして「神々は、宇宙と同じく、一なる無限の神の流出、顕現あるいは形相に他ならない」をまとめ直したものである[8]。つまり、すべての根源にはブラフムと呼ばれる一なる無限の神があり、それが流出してはじめて神々や宇宙が生まれたことになる。バラモン教は、ユダヤ教やキリスト教のような一神教ではなく、一なる至高の神からすべてが流出する汎神論なのである。したがって、トリムールティをなす三神は至高の神の三通りの顕現であり、「父なる神」とされるブラフマーも最初に顕現した神というにすぎない。

読書ノートの２頁目では、最初に顕現した神がヴィシュヌだとする宇宙創成論が書き留められている。「別の宇宙創成論では、ヴィシュヌが第一列を占めており」、「イチジクの葉の上に横たわる」この神が「自分の足をさわる子供の姿で、自分の要素（水）の上で安らいでいると、突然、臍から一本の蓮の茎が伸びて、この花の萼の上に座ったブラフマーが、創造を完成させるためにあらわれる」と書かれている[9]。ここではまずヴィシュヌが顕現し、その臍からブラフマーが誕生す

5）«Brahmâ est la première personne de la Trinité hindoue, Dieu le père, qui s'incarna le premier pour venir annoncer sa doctrine, il y a bien des siècles. [...] Alors parut Siva, la seconde incarnation, apportant le lingam, image de la vie et de la mort. [...] Vint ensuite Vichnou, la troisième incarnation, qui amortit le feu dévorant du sivaïsme»（Frédéric Creuzer, *Religions de l'antiquité, considérées principalement dans leurs formes symboliques et mythologiques*, Ouvrage traduit de l'allemand, refondu en partie, complété et développé par Joseph-Daniel Guigniaut, Paris, Treuttel et Würtz, Tome I, 1825, pp. 140-141.

6）第１稿のノートにおけるトリムールティについては、前掲拙論 50 頁。

7）N.a.fr. 23668, f° 158 v°.

8）«Quant au dieu unique et suprême, il se nomme *Brahm* [...]. [...] il ne saurait avoir aucune figure [...] ; il est l'unité et le tout à la fois»（Creuzer, *op. cit.*, I, p. 151）; «Les dieux ne sont donc, comme le monde, [...] que des émanations, des révélations ou des formes de la divinité unique et infinie»（*ibid.*, p. 153）.

9）«Dans d'autres cosmogonies Vischnou prend le premier rang. Couché sur une feuille de

るようになっている。さらに同じノートには、「ヴィシュヌの継起的な化身。184以下」、「クリシュナ（209）はヴィシュヌの化身の一つ」というように[10]、『古代の宗教』第1巻の該当する頁を記載しながら、ヴィシュヌの化身が描かれる。このようにヴィシュヌを出発点とする神々の系譜もあれば、またシヴァから生み出される神々もあり、ノート全体にわたってさまざまな神々が記される。

第1稿のインドに関するノートが『古代の宗教』のみならず、『バガヴァッド・ギーター』、『マヌ法典』など多くの文献から取られた寄せ集めであり、しかも「バラモンの理想」や「ブッダ」まで含む広範囲のものであったのに対し、第3稿のノートはクロイツェルの著作のみを対象とし、バラモン教の神々に焦点を絞って系統的に記述したものだと言える。

1870年の春に13頁からなる全体のプランが作成されるが、そこではインドの神々は「過ぎゆく雲（ヴェーダ）」「インド人の神々、怪物的、異形」と、簡潔に記されるのみである[11]。とにかく、準備段階では、インドの神々の場面は新たに再編しようとする心づもりはあったようだが、具体的なプランについては実際に執筆を開始してからの段階にゆだねられたのである。

下書き草稿から清書原稿へ

フローベールが第5部の神々の場面にとりかかるのは、1871年5月の終わりから6月初めにかけてである。インドの神々の場面全体のプランは3種類あるが、その第1プランは次のようになっている。

Pasteurs, troupeaux, herbe rase. regarde un nuage plein d'eau qui ne veut pas tomber et par ses prières, il excite à le crever, à tuer le dragon qui enserre les nuages
~~Idoles~~ 1° Une vallée alpestre. L'homme de Védas
la première dualité [...]
2° ~~B~~Vischnou & Maïa sur la mer de lait – De son nombril, Brahma
mâle
~~2~~3° Trimourti – Les trois gds Dieux.
14, 16. - 39. trimourti femelle – Saravasti, Lackmi, Parvati
47
dédoublements
~~3~~4° Les Dieux se dédoublent. ~~Dieux qui se doublent~~ de Çiva –
incarnations de Vischnou.
[...]

figuier, – enfant qui tâte son pied Pendant qu'il repose sur son élément, tout à coup sort de son nombril une tige de lotus & Brahma paraît, assis sur le calice de cette fleur, p^{r} accomplir la création»（N.a.fr. 23668, f° 161 v°）. 出典は Creuzer, *op. cit.*, I, pp. 177-178.

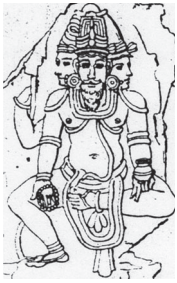
10）«incarnations successives de Vichnou. 184 & sq», «Crichna（209）est une incarnation de Vischnou»（N.a.fr. 23668, f° 161 v°）. フローベールはヴィシュヌを «Vichnou» と書いたり、«Vischnou» と書いたりしている。

11）«un nuage qui passe（Védas）[...] les Dieux des indiens, monstrueux, difformes»（N.a.fr. 23671 f° 95 ; Flaubert, *Scénarios de* La Tentation de saint Antoine : *Le Temps de l'œuvre*, Présentation, transcription et notes par Gisèle Séginger, Presses Universitaires de Rouen et du Havre, 2014, p. 228）.

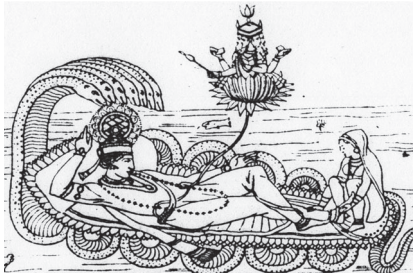
arriver à Krischna – semblable au Christ[12].

フローベールの模索の跡を示す錯綜したプランである。序数詞のついた箇所を拾っていくと、最初は「1° アルプス風の谷、ヴェーダ時代の人」、「2° トリムールティ－三つの大神」、「3° 神々が二重化していく」であったのが、1° と 2° の間に「2° ヴィシュヌとマイア、乳の海の上－臍からブラフマー」が挿入されて、元々の 2° が 3° に、3° が 4° となる。1° の上方には、「牧人、動物の群れ、短い草」、「雨をはらんではいるが降りそうにない雲を見つめ」、「祈祷によって、雲を裂いて、雲を締めつける竜を殺すようかりたてる」という情景が書き加えられる。また、新たな 3° と 4° の間に、「女性のトリムールティ－サラスヴァティー、ラクシュミー、パールヴァティー」と書き込まれる[13]。そして、4° には「シヴァの二重化」、「ヴィシュヌの化身」が加えられて、「クリシュナに至る－キリストに似ている」で終わる。要するに、1° ヴェーダの時代の牧人が雨ごいの祈祷をする、2° 乳の海の上にヴィシュヌとマイアがいて、ヴィシュヌの臍からブラフマーが生まれる、3° 男性のトリムールティがあらわれ、女性のトリムールティへと二重化する、4 ° シヴァやヴィシュヌから次々と神々が化身していき、最後にクリシュナがあらわわれる、という 4 つの小場面から構成されることになる。1° は準備期間に作成されたプランの「過ぎゆく雲（ヴェーダ）」を膨らませたもの、2° から 4° は読書ノートにあった三位一体、ブラフマーの誕生、ヴィシュヌの化身を組み合わせたものである。ただし、プランではトリムールティの前に、ヴィシュヌの臍からブラフマーが生まれる場面が挿入されたため、ヴィシュヌとその妻マイアが先に存在して、トリムールティをなす三神が後であらわれたようなかたちになっている。

プランの左余白には 14、16、39、47 という数字が記されている。これらは『古代の宗教』第 4 巻第 2 部の図版の番号であり、14（図版 1）と 16 はトリムールティを、39 はヴィシュヌの息子のカルティケーヤを、47（図版 2）はブラフマーの誕生を描いている[14]。図版 1 は第 1 プランの 3° の男性のトリムールティの姿をあらわしたもの、図版 2 は



図版 1（14, II）



図版 2（47, IX）

12）N.a.fr. 23668 f° 170 v°. « gds » は « grands » の略記である。

13）クロイツェルの著作では « Saraswati »、« Lakchmi » となっていた女神の名を、フローベールは « Saravasti »、« Lackmi » と書いている。固有名詞の綴りの正確さにはあまりこだわらなかったようである。

14）本論文で掲載する図版はすべて『古代の宗教』第 4 巻第 2 部から取ったものである：Creuzer, *op. cit.*, IV, 2e partie, 1841. 引用した各図版の下の括弧の中に、原著の図版の番号と頁数（ローマ数字）を記している。

2° に相当し、舟に横たわるヴィシュヌの臍から茎が伸びて花の萼の上にブラフマーが生まれる様が描かれている。第1プランではまだ明確ではないが、第2プランを経て[15]、第3プランでは第1プランにあった2° と3° とが完全につながって、ヴィシュヌの臍からトリムールティの三神がうまれるようになる[16]。つまり、図像的に言えば、図版2の萼の上にいるブラフマーの4つの顔の代わりに[17]、図版1のトリムールティの3つの顔が挿入されたかたちとなる。ヴィシュヌからブラフマーが生まれたとする創成論とブラフマーを父なる神とする創成論とが一つにつながったわけである。その結果、ヴィシュヌからヴィシュヌ自身を含む三神が生まれたことになるのだが、もともとバラモン教の宇宙創成論が互いに矛盾し合うものを含んでいるので、それがそのままプランに投影されただけである。

上記のプランから、フローベールの明確な意図がうかがえる。それはバラモン教のもつ多様な面を一連の場面の中に封じ込めることである。至高の神は姿を見せないものの、自然宗教のヴェーダの時代から出発して、ヴィシュヌからブラフマーが生まれ、トリムールティの三神が生まれ、さらにさまざまな化身を繰り返してクリシュナへと至る過程が、まるで走馬灯のように展開する。そこでは互いに矛盾する宇宙創成論間の優劣は問題にならず、すべてが並列化されている。

3つのプランを作成した後、フローベールは補足的なエスキスをつくっているが、その中の一つで結びの場面を次のように変更する。

Bouddha
enfin ~~Krischna~~ semblable au Christ.

sur une natte, jambes croisées
le buste raide – méditant. – nu
et noir. taille & sein de femme
cheveux courts & artistement frisés
bonnet pyramidal –

Mais tout cela paraît inutile[18].

元々の「クリシュナ、キリストに似ている」は、第3稿の読書ノート2頁目の「クリシュナはあらゆる弱きものに従い、人間を救済した」から来ている[19]。バラモン教では、クリシュナはヴィシュヌの第8化身であり、ブッダは第9化身とされるから[20]、救世主がブッダに変換されたとして不思議ではない。右側の余白に書き込まれたブッダの描写は、ブッダに関する第1稿のノートの最後に記された「裸、黒い、短い髪、巻き毛、ピラミッド形の帽子」を元に[21]、膨らませたものである。それに続く「これらすべては無駄なように思われる」は、神々がどれほど化身を

15）N.a.fr. 23670 f° 12.
16）N.a.fr. 23670 f° 126.
17）«*Brahmâ* [...] est reconnaissable à ses quatre têtes»（Creuzer, *op. cit.*, IV, 1ère partie, p. 5）.
18）N.a.fr. 23670 f° 168 v°.
19）«Crichna s'est soumis à toutes les faiblesses pr sauver les hommes»（N.a.fr. 23668, f° 161 v°）. 出典は Creuzer, *op. cit.*, I, p. 221.
20）«Quant à *Bouddha*, la neuvième incarnation»（Creuzer, *op. cit.*, I, p. 189）.
21）«~~nu~~, noir, chev courts, frisés, bonn pyramid»（N.a.fr. 23671, f° 180 v°）. 出典は Creuzer, *op. cit.*, I, p. 293.

繰り返しても無駄であり、終末の時を迎えることを示している。

バラモンの神々とブッダの場面の下書き草稿は、プランやエスキスも含めると全部で 62 頁ある。本論文ではそれらを執筆順にたどることはせず、第 1 プランで示された 4 つの小場面に、ブッダが登場する箇所を加えて、合計 5 つの小場面に分けて、その各々がどのように生成論的に展開していくのかをたどることにする。

1° の雨ごいの場面については、第 2 プランではイラリオンが「牧人はあの雲を締めつける竜を殺すようインドラにかりたてている（強いている）のだと思う」と説明する設定となる[22]。ここでは、祈祷の対象が『リグ・ヴェーダ讃歌』で崇められた神インドラであることが明記されている。しかし、第 3 プランになると、イラリオンの言葉が「彼は自分の歌によって、雲を締めつける巨大な竜を殺すよう天の王に強いているのだと思う」へと変えられる[23]。「天の王」という表現は、フローベールが参照したネーヴの『リグ・ヴェーダ讃歌に関する研究』の中には見られない。これはおそらく、旧約聖書のダニエル書にある、天上の神をあらわす表現から借りてきたものであると思われる[24]。清書原稿により近い段階になると、「雲を締めつける巨大な竜を殺す」が「雨をはらんだ雲を開く」に書き換えられるなど[25]、細部の変更はあるものの、「天の王」は清書原稿まで残る。

2° の場面に関しては、図版 2 の通り、ヴィシュヌとマイアが蛇の舟の上にいて、ヴィシュヌの臍から蓮の茎が伸び、花の萼の上にブラフマーが生まれる様が描かれるのは、3 つのプランから清書原稿まで基本的には変わらない。ただし、清書原稿に近づくにつれて神々の名は消えていき、ヴィシュヌは « un Dieu » に、マイアは « une femme plus petite que lui » に[26]、ブラフマーは « un autre Dieu » に変換されていく[27]。そして、神の名が消える代わりに、イラリオンによる解説が挿入されていく。彼はヴィシュヌとマイアを前にして、「これはバラモンの原初の二重性である。流出の源である一なる神は、いかなる形態においてもその存在をあらわすことはない」と言う[28]。「流出の源である一なる神」とは、ブラフムと名づけられた至高の神に他ならないが、イラリオンは最初に顕現した神をヴィシュヌとし、その同伴者をマイアとすることによって、両者を「原初の二重性」だとしているのである。このようにイラリオンはバラモン教の汎神論的な原理を説明しているのだが、「流出の源である一なる神」という表現はやがて「一なるもの、根源、絶

22）« le pasteur croit exciter（& forcer）Indra à tuer le dragon qui enserre ce nuage »（N.a.fr. 23670, f° 12）.

23）« il croit par ses chants forcer le roi du ciel à tuer l'énorme dragon qui enserre le nuage »（N.a.fr. 23670, f° 126）.

24）*Daniel*, IV, 34 : « Maintenant, moi, Nebouchadneçar, je loue, j'exalte et je glorifie le roi du ciel »（*La Bible*, Traduction par Samuel Cahen, Présentation et annexes par Gilbert Werndorfer, Les Belles Lettres, 1994, p. 1108）. フローベールが『サラムボー』を執筆するときにサミュエル・カエン訳の旧約聖書を参照したことは、書簡からうかがえる（*Corr.*, II, p. 740）。

25）« [...] à ouvrir la nuée féconde »（N.a.fr. 23670, f° 223 v°）.

26）N.a.fr. 23670, f° 190 v°.

27）N.a.fr. 23670, f° 168.

28）« c'est la dualité primordiale des Brahmanes – Quant au Dieu unique, source des émanations, il ne peut se manifester sous aucune forme »（N.a.fr. 23670, f° 190 v°）.

対」へと変換され[29]、清書原稿では単に「絶対」となり、一神教の神との区別がつきにくくなる。

3° のトリムールティについては、第3プランの次の段階の草稿で、2° のヴィシュヌの臍から生まれた神は「3つの顔をもつ、というよりむしろそれらは一つの体におさまった3柱の神である」、「正面の神はブラフマー」、「右の神はより優しげなヴィシュヌ、左の神は恐ろしいシヴァ」と説明される[30]。この三神の描写は、図版1で描かれたものと同一である[31]。さらに次の段階の草稿で、「ブラフマー（46.）自分の足を噛む」という細部が余白に付け加えられる[32]。46は『古代の宗教』第4巻第2部の図版の番号であり、同書の第4巻第2部ではこの図版の説明として、「『水の上を動くナラーヤナ』は創造の永遠で上位の根源とみなされたヴィシュヌか、あるいは同じ性格のブラフマーに与えられた名である。ここでは、ヴィシュヌである」と書かれている[33]。要するに、図版3で描かれた神はヴィシュヌなのだが、創造神としてのヴィシュヌにも創造神としてのブラフマーにもナラーヤナという同じ名が付与されるという説明文を読んで、フローベールは「自分の足を噛む」という動作もブラフマーに適用されると思い込んだにちがいない。この表現は清書原稿でも「足の指の先を噛む」となって残るので[34]、その結果、ヴィシュヌの属性をもったブラフマーが誕生するという奇妙なことになった。他の二神についてはこのような問題はなく、下書き草稿にある「ヴィシュヌ　青い－4つの手」、「シヴァ　恐ろしい骸骨の首飾り」は[35]、正確に『古代の宗教』の記述を反映している。ブラフマーの妻サラスヴァティー、ヴィシュヌの妻ラクシュミー、シヴァの妻パールヴァティーという三神についても、下書き草稿で名前は消えるものの、『古代の宗教』から取られた各々の神の属性がほとんどそのまま清書原稿にまで残る。

図版3（46, IX）

2° の場面と同様に3° の場面でも、神々を構成する原理を説明するのはイラリオンである。早い段階の下書き草稿では、3つの顔をもつ神があらわれたとき、イラリオンの言葉として「これは絶対的な一なるものの3重の顕現であり、3つの相異なる形態をもつ3つの相のもとで流出したものである」という文が書かれ

29）«l'unité, le Principe, l'absolu ne s'expriment par aucune forme»（N.a.fr. 23670, f° 116）.
30）«Il a trois visages, ou plutôt ce sont trois dieux en un corps [...] celui qui est de face Brahma – [...] celui de droite Visch plus aimable. celui de gauche Çiva terrible»（N.a.fr. 23670, f° 200 v°）.
31）ここではブラフマー、ヴィシュヌ、シヴァという順で記されているが、これは『古代の宗教』第4巻第1部での図版の説明と同じ順序である（Creuzer, *op. cit.*, IV, 1ère partie, p. 3）。同書の第1巻の記述をもとにした読書ノートでは、シヴァがヴィシュヌより前に来ている（注4参照）。
32）«Brahma（46.）mordant son pied»（N.a.fr. 23670, f° 166）.
33）Creuzer, *op. cit.*, IV, 1ère partie, p. 11.
34）«[...] mord le bout de son orteil»（N.a.fr. 23666 f° 85）.
35）«Vichnou Bleu – quatre mains [...] Çiva collier de crâne terrible»（N.a.fr. 23670, f° 166）.

る[36]。このトリムールティの正確な定義は、読書ノートにはなく、『古代の宗教』第１巻から直接写し取られたものである[37]。しかし、次の草稿の段階ではそれが抹消されて、「父と子と聖霊は同様にただ一つの体をなすのみである（アントワーヌの驚き）」と書き加えられる[38]。つまり、イラリオンはアントワーヌに理解しやすいように、図版１のようなトリムールティの姿をキリスト教の三位一体になぞらえて、父の顔、息子の顔、聖霊の顔がただ一つの体をかたちづくっていると説明するのである。三位一体という語に関しては、女性のトリムールティが姿を見せたとき、アントワーヌの発する言葉として「なに、また三位一体か」と書き込まれるが[39]、これも清書原稿の前の段階の草稿で削除される。結局、清書原稿では、「父と子と聖霊は…」というイラリオンの言葉だけが残り、アントワーヌは目の前の神々の誕生や化身の様をただ茫然と見つめるだけになる。

4° の場面の下書き草稿では、イラリオンがアントワーヌにさまざまな神の化身を説明する設定になる。イラリオンの言葉として、「ガネーシャ 象の鼻をもったシヴァの息子」、「カルティケーヤ シヴァの２番目の息子、６つの頭と 14 本の腕」というシヴァの息子たち、「ハムサ 白鳥、太陽神」「プラチェタ、鰐の上に乗る－海神」といった自然神など[40]、多くの神の名とその属性が書かれ、最後に「ヴィシュヌ 魚－猪－亀－獅子頭の人－小人－バラモン」というヴィシュヌの６つの化身が付け加えられる[41]。草稿の段階が進むと、神々の名前やシヴァの息子といった語句は削除され、ヴィシュヌもその化身の描写だけが残る。したがって、清書原稿では多くの匿名の神々の属性だけがイラリオンから説明されることになる。

これらの神々の化身の位置づけについては、すでにプランの段階で、「どれほど属性を積み重ねようと、無数のものを列挙したり、触れえないものを描いたり、無限のものを限定することはできない」と書かれていた[42]。つまり、源から流出した神々の属性を積み重ねても、無数で、不可触で、無限の存在である本源の神を表現することはできないということである。この文は下書き草稿の最初の段階ではイラリオンの言葉として残るが、それ以降は削除されてしまう。その代わりに、下書き草稿で「生命は尽き、物質は衰えるので、彼らは自分たちの力を増大させ

36）«c'est la triple révélation de l'unité absolue, s'émanant sous trois aspects en 3 formes distinctes»（id.）.

37）«La *Trimourti*, dans son essence, n'est qu'une triple révélation de *Brahm*, l'unité absolue, s'émanant successivement sous trois aspects divers, en trois formes distinctes»（Creuzer, *op. cit.*, I, p. 630）.

38）«le Père, le Fils et le St esprit ne font de même qu'une seule personne.（étonn d'Ant）»（N.a.fr. 23670, f° 168）.

39）«Comment ? encore une trinité !»（N.a.fr. 23670, f° 166）.

40）«Ganesa fils de Çiva à trompe d'éléphant», «Cartikeya second fils de Çiva, six têtes & quatorze bras», «Hamsa le cygne, dieu du soleil», «Pratcheta, monté sur un crocodile – dieu de la mer»（N.a.fr. 23670, f° 55 v°）.

41）«Vichnou poisson – sanglier – tortue – homme à tête de lion – nain – brahmane»（N.a.fr. 23670, f° 166）. 正しくは、第２化身が亀で、第３化身が猪である。この順番は下書き草稿の途中の段階で修正される。

42）«on a beau accumuler les attributs, on ne peut énumérer l'innombrable, peindre l'intangible, déterminer l'infini»（N.a.fr. 23668 f° 170 v°）.

なければならない」と書き留められ[43]、清書原稿でも「しかし、生命は尽き、形態はすり減るので、変身しながら進んでいくことが彼らには必要だ」となる[44]。結局、至高の神に関する言及は完全に消え、生命の枯渇や形態の消滅に抗うために神々は化身を続けると説明される。

エスキスの段階で書き加えられたブッダについては、まず資料が問題になる。第1稿のために作成された「ブッダ」に関するノートには、『古代の宗教』のほかに、ビュルヌフ『インド仏教史序説』やアベル＝レミュザ「中国の著者による仏教徒の宇宙形状および宇宙創成に関する試論」から取られたメモが書き留められていたが[45]、「キリストに似ている」という第3稿のエスキスの記載にふさわしいブッダの記述は見当たらない。そこで、フローベールは1871年6月14日に姪のカロリーヌ宛に『妙法蓮華経』のフランス語訳を買うよう頼み[46]、その書籍が非常に高価だと知ると6月17日にエルネスト・ルナンに貸してくれるよう依頼している[47]。そもそもフローベールがブッダとキリストとの類似性を意識したのは、ルナンの『宗教史研究』に収められた「イエスの批判的歴史家たち」で、「ブッダ・シャカムニの伝説はその形成の方法によってキリストの伝説とこの上なくよく似ている」と書かれていることがきっかけだと思われる[48]。ルナンに資料を求めたのも、ごく自然な成り行きであっただろう。とにかく、フローベールは一週間ほどで『妙法蓮華経』と『ラリタヴィスタラ』（方広大荘厳経）という二つの経典のフランス語訳を読破する[49]。ブッダの場面に関しては、事前のノートやプランもなく、いわばぶっつけ本番で作成にとりかかったわけである。

ブッダの言葉として下書き草稿に書かれているものの中で、『妙法蓮華経』から取られているのは、「私は大いなる慈悲の主である。信者も不信者も等しく、イチジクの花のように稀な法の開示を享受しなければならない」だけである[50]。それ以外は、ごく一部ビュルヌフ『インド仏教史序説』からの引用を除いて、『ラリタ

43）«La vie s'épuise, la matière défaille & ils sont obligés d'augmenter leur vertu»（N.a.fr. 23670, f° 55 v°）.

44）«Mais la vie s'épuise, les formes s'usent et il leur faut progresser dans les métamorphoses»（N.a.fr. 2366 f° 86）.

45）Eugène Burnouf, *Introduction à l'histoire du buddhisme indien,* Imprimerie royale, 1844 ; Jean-Pierre Abel-Rémusat, «Essai sur la cosmographie et la cosmogonie des bouddhistes, d'après les auteurs chinois», in *Mélanges posthumes d'histoire et de littérature orientales,* Imprimerie royale, 1843, pp. 65-131.

46）*Corr.*, IV, p. 334.

47）*Corr.*, IV, p. 337.

48）Ernest Renan, «Les historiens critiques de Jésus», in *Études d'histoire religieuse*, Michel Lévy, 1857, p. 175.

49）*Le Lotus de la bonne loi*, Traduit du sanscrit, accompagné d'un commentaire et de vingt et un mémoires relatifs au buddhisme par Eugène Burnouf, Imprimerie nationale, 1852 ; *Ṛgya Tch'er Rol Pa ou Développement des jeux, contenant l'histoire du Bouddha Çakya-Mouni*, Traduit sur la version tibétaine du Bkahhgyour, et revu sur l'original sanscrit（*Lalitavistara*）par Philippe-Édouard Foucaux, Imprimerie nationale, 1848. 以下、二つの仏典のフランス語訳を *Le Lotus, Lalitavistara* と略する。

50）«Je suis le maître de la gde Aumône ! & les croyants comme les impies doivent également jouir de l'exposition de la Loi rare comme la fleur du figuier»（N.a.fr. 23670, f° 201）. 出典は *Le Lotus,* p. 282, p. 353.

ヴィスタラ』で描かれたブッダの誕生、少年期、結婚、出家、苦行、悪魔の誘惑、悟りへと至る道筋をほぼそのままたどっていく。そして、例えばブッダの誕生のとき、「星々は動きを止めた」という文の後に[51]、イランリオンの言葉として「彼らは星が止まるのを見たとき、大きな喜びを覚えた」という[52]、マタイ福音書2章9-10節の東方の三博士の逸話が入る。イラリオンはブッダとイエスの生涯の相似性をアントワーヌに教えているわけである。一方、ブッダの思想の根本原理については、下書き草稿においても書き留められることはない。

1840年代からスピノザの熱心な読者であったフローベールにとって、バラモン教の汎神論は理解しやすいものであったにちがいない。ブラフムと呼ばれる一なる無限の神があり、そこから流出して神々や宇宙が生まれる。牧人が祈る天上のインドラ、乳の海の上のヴィシュヌとマイア、そしてトリムールティの誕生、さらにシヴァやヴィシュヌからのさまざまな化身といった変貌の背後には無形の至高の神が存在するのである。下書き草稿には、流出の源である神の存在がイランリオンの言葉の中に書き込まれていたのだが、フローベールは徐々にそれらを消していく。ブラフムに関する言及で、決定稿で残るのは「絶対はいかなる形態によっても表現されない」だけであり[53]、しかもこの「絶対」という語はバラモン教の至高神なのか、キリスト教の絶対神のことなのか、判然としない。トリムールティについても、「父と子と聖霊は同様にただ一つの体をなすのみである」というように[54]、イラリオンはキリスト教の用語をかぶせて、三位一体と混同させるような発言をする。要するに、イラリオンはバラモン教の汎神論的な本質をアントワーヌに理解させないような説明をしているのである。第1プランのように神々の化身の最後にクリシュナがあらわれていれば、『バガヴァッド・ギーター』でアルジュナにブラフマン（＝ブラフム）に近づく道を教えたように、クリシュナが至高の神のことを語ったかもしれないが、そうはならなかった。代わりにブッダが登場し、自らの誕生から悟りを開くまでを語る。イラリオンはイエスの生涯との類似性を指摘するものの、仏教の根本原理を説明することはない。すべては、イラリオンが悪魔となって、アントワーヌに「超えたところに何かを認識することは、神を超えて神を、存在の上に存在を認識することだ」と指摘する第6部まで[55]、先延ばしになるのである。

（大阪大学名誉教授）

51）« des étoiles s'arrêtèrent »（N.a.fr. 23670, f° 190）. 出典は *Lalitavistara,* p. 81.
52）« & quand ils virent l'étoile s'arrêter, ils conçurent une gde joie »（N.a.fr. 23670, f° 176）.
53）« [...] l'Absolu ne s'exprimant par aucune forme. »（Flaubert, *La Tentation de saint Antoine*, Édition présentée et établie par Claudine Gothot-Mersch, Gallimard, « Folio », 1983, p. 163）
54）« Père, Fils et Saint-Esprit ne font de même qu'une seule personne ! »（*id.*）
55）« Concevoir quelque chose au-delà, c'est concevoir Dieu au-delà de Dieu, l'être par-dessus l'être. »（*ibid.*, p. 212）